

無断使用をお断りします。日科技連出版社

# 気づきと実践の 社会心理学

喜岡恵子 北村英哉 桐生正幸 大久保暢俊 著



日科技連

## はしがき

本書は社会心理学の教科書として、社会心理学のさまざまな学問的知識をその研究方法や検証実験などによるエビデンスとともに学べることを第1の目的として編んだものである。さらに本書では、社会心理学の知見を、現実社会において適用した事例を数多く示している。読者がそれらを参考にして、社会心理学の知見を学問の中にとどめることなく、自身にとっての気づきをもって、日常生活での小さな実践につなげられることを第2の目的としている。そのため、章タイトルも実践を促す動きのあるものにした。

第1章から第5章までは社会心理学の王道ともいえる学問的知識を扱い、第6章から第9章までは現代社会が直面する具体的な課題を取り上げ、社会心理学的知見が課題解決や対策に生かされる場面を紹介する。

本書は集団そのものを対象とする研究ではなく、1920年代以降の、オールポート(Allport, F. H.)に代表されるような、集団の中の個人に焦点を当てた社会心理学の研究を紹介する。例えば、クーリー(Cooley, C. H.)のいう鏡映的自己においては、自己についての意識は、常に社会的であり、他者とのコミュニケーションによって形成されるものとする。人は他者という鏡を通して自分を知り、身体でさえ、「私はあなたより背が高い」など、人との比較の中で意識され、自己感情を喚起するという。個人の行動は「社会的な刺激として働く反応、あるいは社会的刺激に対する反応」としてとらえる。

社会心理学は、ゲシュタルト心理学や認知心理学、進化心理学などの影響を受けて学問として発展していくとともに、第二次世界大戦などの時代背景の影響や、科学技術の進展に伴って進歩したマス・コミュニケーションやインターネット・コミュニケーションなどのコミュニケーション手段の影響も受けている。

インターネットは、その前身である ARPANET(アーパネット)が1969年に

米国内の4つの大学・研究機関での接続に成功して以来、進化を遂げながら世界中を結んできた。1989年にはWebが誕生し、2004年にはSNS(Social Networking Service)が出現した。モバイル端末の普及と相まって、日常生活上の問題はインターネットを介してきわめて短時間で解決できることが増え、また、人と人とのつながり、人と社会とのつながりも大きく変化してきた。

そのような時代にあっても、2024年の元日には石川県能登地方において地震が発生し、震度7の揺れが観測され、多くの方々が犠牲となった(令和6年能登半島地震)。1月23日現在の被害状況は石川県で233人死亡、19人安否不明である。また、能登半島地震の翌日の1月2日には、羽田空港において、日本航空516便が着陸直後に海上保安庁の航空機と衝突し、海上保安庁の航空機に乗っていた6人のうち5人が死亡する事故が起きている。日航機の機体は炎上したが、乗客乗員379人全員が脱出し、日航機側の死者は出なかった。さまざまな科学技術や通信技術が発展しても、それだけでは、今なお救えない命があることを目の当たりにしたが、その一方で、自然災害や事故が発生したときに、日ごろの訓練が生かされ、的確な指示が出され、人々がそれを信頼し、協力しあえることで救える命があることも示された。一人ひとりの行動の背景には、組織や社会が育ててきた個の力と信じ合える社会の力があつたに違いない。社会心理学の学習を通して、個が気づき、実践し、力をつけることで、個人だけでなく社会も強くしていくことを期待してやまない。

最後になってしまったが、本書の編集をご担当いただいた日科技連出版社の鈴木兄宏氏、石田新氏、前任の田中延志氏(退職)には、完成に向けてのそれぞれの節目において適切な助言や支援をいただき、また、私たちの遅れがちな歩みを辛抱強く見守り、励ましていただいた。心より感謝を申し上げる。

2024年1月

著者を代表して  
喜 岡 恵 子

## 目 次

はしがき	iii
<b>第1章 自己を知る</b>	1
1.1 自己を考える	1
1.2 自己意識	2
1.3 自己評価	7
1.4 他者に見せる自己	14
1.5 本章のまとめ：自己研究の展開	19
第1章の引用・参考文献	20
<b>第2章 対人関係を築く</b>	23
2.1 対人魅力と好意の人間関係	23
2.2 社会的態度	31
第2章の引用・参考文献	38
<b>第3章 認知バイアスに気づく</b>	41
3.1 対人認知	41
3.2 社会的認知	44
3.3 スキーマ	48
3.4 ジェンダー平等	52
第3章の引用・参考文献	55
<b>第4章 集団としての意思決定をする</b>	57
4.1 集団と個人の心理	57
4.2 集団意思決定	64
4.3 集団間関係	65

4.4	公正と道徳	69
	第4章の引用・参考文献	71
<b>第5章</b>	<b>消費の意思決定をする</b>	<b>73</b>
5.1	購買は問題解決	74
5.2	購買意思決定	79
5.3	消費者の知覚と態度	84
5.4	社会的影響	88
5.5	本章のまとめ：消費者行動論と社会心理学	93
	第5章の引用・参考文献	94
<b>第6章</b>	<b>対人関係のトラブルを考える</b>	<b>97</b>
6.1	対人関係のトラブルとしての犯罪	97
6.2	対人行動のトラブルにおける犯罪	104
6.3	対人関係における問題の解消	112
	第6章の引用・参考文献	117
<b>第7章</b>	<b>犯罪に向き合う—日本の司法システムと心理学—</b>	<b>121</b>
7.1	日本の司法制度	121
7.2	司法・犯罪分野で活躍する心理職	127
7.3	身の周りに潜む犯罪と対峙する	134
	第7章の引用・参考文献	145
<b>第8章</b>	<b>危機に向き合う</b>	<b>149</b>
8.1	リスクを低減する	149
8.2	闘争—逃走反応	151
8.3	危機管理	153
8.4	避難情報の送り手と受け手	154
8.5	災害時の避難行動モデル	158
8.6	東日本大震災時の津波からの避難行動	161

8.7	正常性バイアス .....	163
8.8	平成 30 年 7 月豪雨における倉敷市真備町の クライシスコミュニケーション .....	166
8.9	自助・共助・公助 .....	169
	第 8 章の引用・参考文献 .....	170
<b>第 9 章</b>	<b>リスクを評価・判断する</b> .....	<b>173</b>
9.1	リスクを測る .....	173
9.2	リスクイメージ .....	179
9.3	リスク認知と認知バイアス .....	182
9.4	リスクと便益 .....	186
9.5	技術的、制度的、心理・社会的側面からの リスク低減アプローチ .....	187
9.6	リスク政策 .....	189
	第 9 章の引用・参考文献 .....	191
索 引	.....	195

- 仕事を通しての個人の成長や学習の機会
- 仕事以外の生活と仕事との生活のバランスおよび相互作用
- 公正で十分な賃金および報酬
- 自分の仕事为社会に貢献する程度

サーバントリーダーシップ論では(Greenleaf, 1977)、部下の目標や達成を支援する役割を重視し、部下を配慮し、うまく成長に導くことが大切で、能力を最大限引き出すことが目標となる。上司は支援をし、部下の主体的な行動を引き出すことに努める。この観点では、部下に対するハラスメントを防止し、部下の人格の配慮による、部下の情緒的満足を高めることから、組織モラルが維持できる点が、現代においても注目されている点である。

職務満足感をもたらす要素としては、仕事、労働条件、人間関係、仕事以外の生活、個人属性が関連することを、小野(2019)は指摘している。

近年はこうした部下の人権に配慮したリーダー像が求められており、コンプライアンスの重視とともに、職場に不満が鬱積し、若手が早期離職しないためにも公正な職場環境に注意が向けられるようになってきた。その一つが、倫理的なリーダーシップという概念に反映している。その要素としては、部下の意見を十分聴取し、社員が道德規準に従うよう導き、その手本を示し、いかに達成していくかの道のりも重視し、教示すること、そして、自身が公正かつ公平な決定を行うことが大切である(Brown et al., 2005; 坂田, 2017)。

## 4.2 集団意思決定

---

ジャニスは、キューバ危機に絡む作戦における実例の分析から、集団意思決定が偏っていく現象を指摘した。議論の中で1つの方向への同調が生じ、リスクから目をそらし、異論が許されない雰囲気が醸成され、自分たちの決定の正しさが過信されていく傾向があると指摘している(Janis, 1971, 1972)。

集団意思決定において必ずしも賢明でない選択に結論が進んでしまうこうした現象を、ジャニスは集団思考(集団浅慮)と呼んだ。

こうしたことが生じやすいのは、一つには、いつの間にか集団の同質性が高まることによって、物の見方が偏ってしまうことによる。組織において、価値観の近い者を採用、登用し続けることによって、異質さが集団の中で減じてしまう。同じタイプの者たちが、同じような発想で、同じ誤りをしていることに気づかない事態が生じるのである。また、重要な決定ほど秘密裏に行われる傾向があるので、特定の集団から広げて是非を諮るような機会がもてなくなってしまう。また決定までの時間的プレッシャーがあると、ますます多様なアイデアによって考え直すゆとりも失われ、自分たちの決断が正しいものと確証してしまいやすくなるであろう。

集団浅慮を防ぐには、意識的に多様な価値観をもつ者たちが多様な意見を発言できる雰囲気を醸成し、耳を傾けて議論ができるような状態を維持することが有効であろう。

また、議論の中で、結論が極端な方向へ振れていく場合があることも指摘されており、これをリスクシフトと呼ぶ(Stoner, 1961)。

## 4.3 集団間関係

---

### 4.3.1 社会的アイデンティティ理論

社会的アイデンティティ理論を提唱したタジフェルら(Tajfel, 1971; Tajfel et al., 1971)は、集団間の関係に基づく多くの現象を解析した。人は、自身が属する集団である内集団と、自身が属していない集団である外集団を区別する。自身のセルフ・エスティームは、属する集団がよき集団であることから得られる集団自尊心を通じて、間接的に維持、高揚することができる。内集団が優れた集団であることに自身もメリットを感じることから、内集団に有利な形でのがらを理解する傾向をもつ。

タジフェルらは、報酬分配の実験を通じて、人が内集団をひいきすること、しかも、歴史的経緯もない、ただ2つの集団に分かれただけである最小条件集団において、内集団ひいきが生じることを示した。



図 4.3 の報酬分配のマトリクスから自分ではない内集団メンバーと外集団メンバーに対してどれを選ぶかの実験を行うにあたって、内集団が表の下側である(a)では、右に行くほど内集団も外集団も値が上昇するが、左のほうでは内集団が不利であったのが、13で同じとなり、それ以降、右に行くほど内集団の有利さが増していくことになる。一方、内集団が表の上側となっている(b)では簡単ではなく、右に行く絶対的な分配量は大きな数になる一方、外集団と比較すると不利になっていく。どの組合せを分配として選ぶかで、内集団ひいきの程度がわかることとなる。(a)の選択位置から(b)の選択位置を引くことによって、内集団ひいきないし外集団への敵視の程度が見られると考えられる。こうした結果から、一つの条件では約72%の内集団ひいきが見出され、意味のある集団間だけでなく、最小条件集団パラダイムと呼ばれる意味合いの薄い集団分けにおいても生じることをタジフェルらは示した。

外集団が内集団にとって妨害にならない限り、即座に外集団を攻撃しようという動機づけは生じない。しかし、限られた領土を確保することや、利益が衝突するような状況においては、内集団の利益は、そのまま外集団にとって損失となるので、集団間の対立がより切実なものとなるであろう。

人事などの限られたポストでも、特に外集団に意図的に被害を与えようとは考えていなくても、内集団成員を優遇してしまうと、結果的に外集団の人たちには不利益となることもある。

内集団成員を優遇することは、互惠的利他主義の観点からも、より互惠性を確実に期待できる顔を見知った内集団成員間で協力行動を行うことで、将来の

(a)	外集団	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	内集団	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25
(b)	内集団	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	外集団	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25

図 4.3 内集団ひいき測定のための分配マトリクス(Tajfel et al., 1971)

自己の利益をより確かなものとすることができる(清成, 2002)。

時に外集団に対して冷淡となるのは、相手をよく知らず、身近に感じられないという背景もある。より距離の離れたところでの出来事は、身近な出来事よりも援助しようという動機づけが弱いことが示されている。このように、詳細な知識の欠けたステレオタイプ・イメージから偏見が生じることもある。

### 4.3.2 偏見

人は集団に対して、決まり切ったイメージで先入観を抱くことがある。これがステレオタイプと呼ばれるものである。ステレオタイプに基づいて、好悪の感情を発動させると、それが偏見となり得る。はっきりした嫌悪や敵対心でなくても、ステレオタイプから相手の性質やそれに基づく欲求を決めつけてしまうと往々にして偏見的対応が生じてしまいやすい。

第3章でフィスクらのステレオタイプ内容モデルを示す中で、ステレオタイプ・イメージが、その集団に対する感情にも影響することが図示されている。ここでは、一般的に第三者がどのように集団を見るかという点から描かれているが、ここから集団間関係を拾い出すこともできるだろう。

対角にある「能力高/温かさ低」vs「能力低/温かさ高」という条件は、現実には、「都市部 vs 地方」、先進国と途上国の南北問題、キャリアの追求と子育てなどの考え方を巡り、対立要素を含んでいる。内集団/外集団の原理に基づけば、人は自分を防衛するために、対置されている逆の立場の者を攻撃し、貶めることも生じる。大衆迎合的な振る舞いの中で、反知性主義を示すことなどもこの図式から理解できる。

この中では、他集団を敵対的に認識することが含まれていたが、排斥的な対応が起こりやすい条件も考えられる。第1章で描かれた社会的比較の要素を加味すると一段と理解がしやすくなる。自分で大切にされている価値のもと、自分の有利な特徴を重視すれば、その引き換えに対立他者の有する特徴の価値を下げた見ることがもたらされることがある。

たとえば、スポーツに大きな価値を見出さないことは、スポーツに熱を入れ

索引

【英数字】

4枚カード問題 47  
 5つの道徳基盤 70  
 A → C 方程式 101  
 ambivalent sexism 54  
 base rate 46  
 BSRI 52  
 CGT モデル 99  
 CIT 132  
 DV 31, 131  
 Elaboration Likelihood Model  
 36  
 ELM 36  
 IAT 50  
 ——の実施手順 51  
 Implicit Assosiation Test  
 50  
 ISO/IEC GUIDE 51  
 173  
 NIOSH 職業性ストレスモ  
 デル 112  
 pluralistic ignorance  
 33  
 PM 理論 63  
 SNS 134  
 ——を介した犯罪  
 135  
 SSA 101  
 stalking 106

【あ行】

安全 149, 173  
 意思決定プロセス 94  
 意思決定方略 80, 94  
 ——の分類 80  
 一面呈示 35  
 一貫性 92  
 偽りの合意性現象 32

依頼 37  
 印象管理 89  
 印象形成 41  
 隠匿情報検査 132  
 インフォーマル軍団 59  
 陰謀論信念尺度 35  
 ウェイソンの選択課題  
 47  
 オオカミ少年効果 156  
 オーバーフロー・モデル  
 159, 160

【か行】

外見の魅力 23  
 外集団 65  
 加害者要因 97  
 価格 82  
 科学警察研究所 133  
 科学捜査研究所 132  
 学習予測プロセス 102  
 拡張型問題解決 76  
 加重加算型 80, 81  
 カスタマーハラスメント  
 108  
 家庭裁判所 128  
 ——調査官 129  
 空振り 155  
 間隔マーケティング 84  
 環境心理学 98  
 環境設計による犯罪予防  
 98  
 環境犯罪学 98  
 鑑識 125  
 感情ヒューリスティック  
 184  
 鑑定業務 125  
 寛容 69  
 危険の認知 159  
 基準確率 46

希少性 93  
 帰属過程 42  
 帰属の3段階モデル 42  
 機能的攻撃性尺度 104  
 規範的影響 61  
 基本的帰属の錯誤 42  
 虐待 131  
 客体的自己 2  
 凝集性 60  
 共助 170  
 強制処分 123  
 強制捜査 123  
 共有内集団アイデンティティ  
 69  
 緊急逮捕 124  
 近接性 25  
 クライシスコミュニケー  
 ション 153  
 クライシスマネジメント  
 153  
 経験階層 87  
 経験則 76  
 刑事事件の流れ 122  
 刑事訴訟法 121  
 刑法 121  
 計量多次元尺度法 102  
 決定木 101  
 権威 93  
 現行犯逮捕 124  
 限定的問題解決 76  
 好意 23, 93  
 行為者—観察者間バイアス  
 43  
 合意的選択理論 99  
 効果階層 94  
 ——の理論 87  
 攻撃性 104  
 公助 170  
 公正 69  
 公的自己意識 6

- 行動の合理性 100  
 行動プライミング効果 50  
 購買意思決定 79  
 購買活動 74  
 公判 126  
   —手続きの流れ 127  
 合理的選択理論 100  
 勾留 124  
 考慮集合 77  
 コーピング 112  
   —特性簡易評価尺度 114  
   —方略 114  
 誤警報 156  
   —効果 156  
 コミットメント 92  
 コレスポンデンス分析 102
- 【さ 行】**
- サーバントリーダーシップ論 64  
 罪刑法定主義 121  
 最小空間分析 101  
 最小条件集団 65  
 裁判 126  
 ジェンダー 52  
 自我同一性 2  
 事件リンク分析 101  
 自己 1, 2, 19  
 自己意識 5, 19  
   —理論 5  
 自己開示 17, 19, 27  
   —の相互性 27  
   —の返報性 27  
 自己規定領域 11, 12  
 自己高揚 9, 89  
 自己注目 3  
 自己呈示 14, 19  
   —行動 15  
   —の主要な機能 16
- の分類 15  
 自己評価 7, 19  
   —維持モデル 10, 12  
 自己奉仕バイアス 43  
 自助 169  
 辞書編纂型 80  
 施設心理士 131  
 私的自己意識 6  
 児童自立支援施設 131  
 児童心理司 131  
 児童相談所 128, 131  
 児童福祉施設 131  
 児童養護施設 131  
 社会的アイデンティティ理論 65  
 社会的影響 57, 89, 91, 94  
 社会的交換 28  
 社会的証明 92  
 社会的促進 57  
 社会的手抜き 57  
 社会的認知 44  
 社会的比較過程理論 7  
 社会的プライミング効果 50  
 社会的要因 159  
 社会的抑制 57  
 社会的欲求 89  
 習慣的意思決定 76  
 集団意思決定 64  
 集団間関係 65  
 集団規範 58  
 集団思考 64  
 周辺特性 41  
 主体的自己 2  
 主張的自己呈示 15  
 状況要因 97  
 情動焦点型コーピング 114  
 少年院 128  
 少年鑑別所 128, 130  
 少年刑務所 128  
 少年サポートセンター 133
- 少年補導専門員 133  
 消費 73  
 消費者行動論 73  
 消費者ハイパー選択 76  
 情報処理的アプローチ 44  
 情報の影響 61  
 譲歩の返報性 38  
 職業ステレオタイプ 48  
 職務満足感 64  
 初頭効果 42  
 親近効果 42  
 人的証拠 123  
 心理職 127  
 心理的近さ 11, 12  
 心理的抵抗効果 35  
 数量化理論Ⅲ類 102  
 スキーマ 48  
 ステレオタイプ 48, 52, 98  
   —内容モデル 54  
 ストーカー 106  
 ストッキング 106  
 ストレス 112  
   —コーピング 113  
   —対処行動 113  
   —反応 112  
 ストレッサー 112  
 正常化の偏見 164  
 正常性バイアス 164  
 精緻化見込みモデル 36  
 性役割質問紙 52  
 セールス・プロモーション 75  
 説得 34  
 セルフ・サービング・バイアス 43  
 セルフコントロール 108  
 潜在測定 50  
 潜在連合テスト 50  
 戦術的自己呈示 15  
 選択肢過多仮説 78

洗脳 38  
 戦略的自己呈示 15  
 想起集合 77  
 相互作用 26  
 捜査 122

## 【た 行】

対応バイアス 42  
 対応分析 102  
 第三者効果 34  
 対人魅力 23  
 態度 31, 87  
 ——概念 84  
 ——の3成分 87  
 ——の3要素 32  
 ——の類似性 29  
 退避 158  
 代表性ヒューリスティック  
 46  
 逮捕 124  
 多元的無知 33  
 多次元尺度法 101  
 他者とのつながり 89  
 他者の遂行 11, 12  
 段階的要請法 37  
 単純加算型 80  
 逐次消去型 80, 81, 82  
 中心特性 41  
 地理的プロファイリング  
 132  
 通常逮捕 124  
 低関与階層 88  
 ドア・イン・ザ・フェイス  
 38  
 等質性分析 102  
 統制のプロセス 44  
 闘争-逃走反応 152  
 同調 60  
 道徳 69  
 特殊詐欺 142

## 【な 行】

内集団 65  
 ——ひいき 65  
 二過程モデル 36, 44  
 乳児院 132  
 任意捜査 123  
 ——の原則 123  
 認知上の斉合性 30  
 認知的斉合性理論 29  
 認知的ストレス理論  
 112  
 認知的バランス理論 29  
 認知的評価 112  
 認知的不協和理論 30  
 ノーマル・アクシデント  
 190

## 【は 行】

バイアス 42  
 発見法 44  
 バランス理論 29, 32  
 ハロー効果 23  
 反映過程 11  
 犯行地点選択モデル 98  
 犯罪 97, 121  
 犯罪心理学 97  
 犯罪パターン理論 98  
 犯罪被害者 133  
 犯人像推定 101  
 被影響性尺度 35  
 被害者支援施設 133  
 被害者要因 97  
 比較過程 11  
 非計量多次元尺度法  
 102  
 避難 158  
 非補償型 80, 81, 94  
 ヒューリスティック 44,  
 76, 83  
 標準的学習階層 87  
 プーメラン効果 35

フォーマル軍団 59  
 フォールス・コンセンサス  
 32  
 服従 61  
 物的証拠 123  
 フット・イン・ザ・ドア  
 37  
 プライミング効果 50  
 プロアクティブ・コーピン  
 グ 115  
 ——尺度 116  
 分離型 80, 82  
 偏見 67  
 返報性 18, 26, 92  
 防衛的自己呈示 15  
 法務技官 130  
 法務少年支援センター  
 130

暴力犯罪 104  
 保険金詐欺 139  
 保護観察所 128  
 母子生活支援施設 132  
 ポジティブ心理学 115  
 補償型 80, 81, 94  
 補償作用 54  
 ポリグラフ検査 132

## 【ま 行】

マッチング仮説 25  
 慢性型 107  
 見逃し 155  
 メンタル・アカウンティン  
 グ 84, 94  
 モラルリスク 141  
 問題焦点型コーピング  
 114

## 【や 行】

歪み 42  
 ユニークネス 89

<b>【ら 行】</b>	リスクコミュニケーション 153	153
リアクタンス効果	リスク政策	両価的な性差別 54
リーダーシップ	リスクゼロ	利用可能性ヒューリス ティック 44, 183
リスクシフト	リスク低減	両面呈示 35
リスク	——のプロセス	類似性仮説 7
リスクアセスメント	リスク認知	ルーティン・アクティビ ティ理論 99
174, 175	——の2因子	令状主義 123
——のプロセス	リスク評価	連結型 80, 82
175	リスク分析	
リスクイメージ	リスクマネジメント	
179		
リスク管理		
153		



## 執筆者紹介

### 喜岡 恵子(きおか けいこ) 第8章・第9章執筆担当

東洋大学総合情報学部総合情報学科准教授。

東京大学大学院教育学研究科(教育心理学専攻)博士課程単位取得後満期退学。財団法人(現 公益財団法人)鉄道総合技術研究所 人間科学研究部(安全心理)主任研究員を経て現職。

近著に『Excel ではじめる調査データ分析』(オーム社)などがある。

### 北村 英哉(きたむら ひでや) 第2章・第3章・第4章執筆担当

東洋大学大学院社会学研究科長、社会心理学科教授。日本心理学会常務理事。日本感情心理学会、パーソナリティ心理学会理事。博士(社会心理学) 東京大学。

関西大学を経て現職。主な共編著訳書に『偏見や差別はなぜ起こる』(ちとせプレス)、『私たちを分断するバイアス』(誠信書房)などがある。

### 桐生 正幸(きりう まさゆき) 第6章・第7章執筆担当

東洋大学社会学部長、社会心理学科教授。日本犯罪心理学会常任理事。日本心理学会代議員。文教大学人間科学部人間科学科心理学専修。博士(学術)。

山形県警察科学捜査研究所主任研究官、関西国際大学教授、同大防犯・防災研究所長を経て現職。

主な著書に『カスハラ の犯罪心理学』(集英社インターナショナル)などがある。

### 大久保 暢俊(おおくぼ のぶとし) 第1章・第5章執筆担当

東洋大学社会学部非常勤講師。博士(社会学)。

主な共著書に『よくわかる社会心理学』(ミネルヴァ書房)、『消費者心理学』(勁草書房)などがある。

### 島田 恭子(しまだ きょうこ) 第6章分担執筆担当

東洋大学現代社会総合研究所客員研究員、一般社団法人コロバランス研究所代表理事。博士(保健学)。

### 大高 実奈(おおたか みな) 第7章分担執筆担当

東洋大学大学院社会学研究科。公認心理師。

無断使用をお断りします。日科技連出版社

## 気づきと実践の社会心理学

2024年2月26日 第1刷発行

著者 喜岡 恵子  
北村 英哉  
桐生 正幸  
大久保暢俊  
発行人 戸羽 節文

発行所 株式会社 日科技連出版社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-15-5  
DSビル  
電話 出版 03-5379-1244  
営業 03-5379-1238

検印  
省略

Printed in Japan

印刷・製本 壮光舎印刷

© Keiko Kioka et al. 2024

ISBN 978-4-8171-9793-1

URL <https://www.juse-p.co.jp/>

本書の全部または一部を無断でコピー、スキャン、デジタル化などの複製をすることは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。